

たまフォーラム・オープンカレッジ 地元6大学リレー講座

大学と地域の共生を考える

生田緑地の活用を見目助教授が講演

川崎北部地域の大学と企業、NPO、地域が連携して、生活文化関連産業を創出するためにさまざまな活動を行っている「たま市民生活・文化産業おこしフォーラム」(以下、たまフォーラム)が、生田キャンパスで10月12日と19日に地元6大学のリレー講座を行った。統一テーマは「たまの地域資源を活かしてまちを耕すー大学と地域の共生」。

19日には、本学の見目洋子商学部助教授が「生田緑地の新たな活用を探る」と題して講演した＝写真。商品学・商品開発論を専門とする見目助教授は都市アメニティとしての生田緑地の潜在力を高く評価し、「地域は作るものではなく、耕すもの。生田緑地の魅力をアピールするためのグランデザインを早急に描き、トップダウンではなく、住民参加型の活動を立ち上げる必要がある」と語った。

たまフォーラムは本学の平尾光司経済学部教授が座長を務め、明治・田園調布学園・聖マリアンナ医科・日本女子・和光の各大学が参加している。



多摩区選管で就業体験

大学院生の森木宏和さん

小林弘和教授の指導のもと、法学研究科修士課程で地方自治について研究している森木宏和さんが、10月8日から23日まで川崎市多摩区の選挙管理委員会で就業体験を行い、23日投開票の神奈川参院補選と川崎市長選の選挙事務に携わった。

多摩区は区内にある本学、明治、日本女子の3大学との連携を進めており、その一環として実施されたもので、同区の選管で学生が就業体験を行うのは初の試み。

期日前投票の用紙を渡す業務や、立会人、啓発グッズの配布、投開票事務説明会、開票作業など一連の流れを経験した。特に署名や確認を行う代理投票では「責任の重さを実感しました」。予想外に低かった投票率については「先の衆院選の盛り上がり比べてメディアの扱いも小さかった。しかし、一番身近な首長を選ぶという重要性をもっと認識するべきでは」と語る。



職員の方から丁寧な指導を受ける森下さん(中央)

「若い世代の関心を高めるには、今回のような就業体験はきわめて有効だと思います。どれほど多くの人々が選挙事務に携わっているのか一度でも体験すれば、今後の投票行動に結びつくのでは。行政はもっと学生を活用すべきだと思います」。

3年次の時に「これからは地方自治がダイナミックに転換する。自分なりの強みをもって公務員になろう」と大学院進学を決意。昨年夏に、市のインターンシップに応募し、高津区の地域振興課でイベント企画や、さまざまな団体の事務局の方と接するなどの経験が、公務員志望をますます強くした。

来春から念願かなって川崎市役所で働く。「人口20万の多摩区で専大生の比率ははずば抜けていると思います。大学と行政、商店街などが連携して、住んでいる町を活性化していくためのパイプ役として、いずれは区や大学に恩返しできれば」と抱負を語る。

修士論文のテーマは「地方自治体の補助金制度」について。「今回の選挙から受付をデータ処理するというシステムの変革期に立ち会えたことは貴重な経験となりました。選挙事務以外にも、さまざまなセクションの方から声をかけていただいて、行政事務の実際を見聞でき、修士論文作成の参考にさせていただきます」と話した。

通訳コンテストで実力試す

英語英米文学科・田邊ゼミ

文学部の田邊祐司ゼミは、日英通訳者養成法をベースに英語・日本語両方の力を高め、思考力やプレゼンテーション能力を鍛えている。10月29日には、恒例の通訳コンテストが生田キャンパスで行われ、日ごろの学習成果を競った。

今年のテーマは「ALT(※)の功罪」。まずゲストスピーカーのTimothy Wright大妻女子大学教授が話す内容を日本語に逐次通訳。続いて、服部孝彦同大教授の日本語を英語で表現する。テーマは事前に知らされているが、順番は当日発表という緊張の中、4年次生17人が順番に登壇し、プレゼンを披露。審査の結果、1位本間理恵さん、2位石黒豊さん、3位加藤京子さんが上位の成績を取めた。

1年次の基礎ゼミで田邊教授に出会い、高校までとは違う「英語学習法」に衝撃を受けたという本間さん。1年かけて「アメリカ口語教本」の入門から上級まで、テープそっくりの発音になるまで特訓。「留学経験はありませんが、授業でシャドウイングや2人一組で行うクイック・リスponsによって実践的な力が身につきました」と話す。「単語だけを覚えるのではなく、例文と一緒に覚えるのが語彙を増やすコツです」と教えてくれた。

当日は早稲田、玉川両大学の学生もリスナーとして参加した。田邊教授は「ゼミ生は緊張していたようですが、他大学生にも公開することで度胸もつき、刺激になります」と狙いを語る。

司会やあいさつは3年次生が流暢な英語で担当した。先輩たちの活躍が来年参加する彼らにとって目標となり、学習意欲が高まったことだろう。

※Assistant Language Teacher＝外国人語学指導助手



左から石黒さん、本間さん、加藤さん



田邊教授

学生部主催の講習会

ボランティアに生かそう — 生田キャンパスで —

手話 点字 ノートテイク 介護

学生部では、10月から12月にかけて4時限以降の時間帯を利用し、生田キャンパスでボランティア活動を目的とした①「手話」森都(もり・みやこ)先生、②「点字」=天木佐代子先生、③「ノートテイク」=宇津木由美子、安久津真佐子両先生、④「介護」=服部万里子先生 — の講習会を実施している。

このうち「手話講習会」に参加している井下(いした)優貴子さん(文3)は「バイト先での経験から、手話の必要性を感じ、今年初めて参加しました。参加してみて、意外と覚えやすいものだと分かりました。毎回身近なことから丁寧に教えていただけるので、楽しんで受講しています」と語っていた。



みんな真剣に手話表現(10月18日)



基本からきっちり学ぶ(10月19日)



ノートテイクの意義を学ぶ学生(10月27日)



車椅子を使つての移動訓練(11月7日)

韓国・檀国大学からの特別聴講生 専大附属高訪れ交流

9月27日、韓国の檀国大学からの留学生(特別聴講生)4人が専大附属高校(東京都杉並区)を訪ね、同校生徒と交流した。訪問したのは金載正さん、安智勲さん、禹智賢さん、趙セロムさんで同校からは生徒20人が参加。留学生たちが、韓国文化や日本文化との違いなどについて積極的に話しかけると質問も活発で、交流会は1時間以上続いた。

「皆さん、日本語が上手で驚いた」「教育や恋愛観など両国の違いが聞けて有意義だった」「時間が足りない。もっと話をしたかった」…といった感想が寄せられた。

同校と檀国大学の附属高校とは姉妹校で、夏休みには研修旅行を実施している。また3年次の選択教科として「韓国語」と「ドイツ語」が設定されており、韓国に対する生徒の関心は高い。



「楽しかった」の声が多数寄せられた交流会



2班に分かれてディスカッション

専大松戸高が「書道・美術展」

専大松戸高(千葉県松戸市)の「平成17年度書道・美術展」が11月8日から、JR新宿駅西口のコンコースギャラリーで開催されている。18日までが書道展＝写真、引き続き美術展が28日まで行われ、生徒たちの力作が通りを彩る。

